

私たちの活動や意見を  
仲間で共有します  
会費は県と日本平和委  
員会の活動も支えます

# 土浦平和の会ニュース

発行：土浦平和の会  
事務局：土浦市鳥山2-530-  
296  
ホームページ：//heiwatutiura.  
web.fc2.com/

## 2017平和の旅で再認識された 山宣の意志を今日に生かそう



別所温泉にある  
山本宣治の碑  
(中央)。左右の  
碑は山本の碑  
再建後に造られ、  
右がタクラ・テ  
ル、左が齋藤房  
雄さんの顕彰碑  
＝上田市

今年の平和の旅は多くの参加者から「とてもよかった」「充実していた」との感想が寄せられていますが、中でも山宣＝山本宣治の碑とそれにまつわる説明が感動的で山宣を再認識したとの評価が多いです。そこで、旅行に参加できなかった方々にも知っていただき、憲法を守る運動の力にさせていただくために、山宣の人物像とその碑について改めてまとめてみました。

### 宇治市出身労農党代議士

山宣＝山本宣治 1889年、京都市で生まれ、京都府宇治市で育つ。18歳で園芸修業のためカナダへ渡り、自由や民主主義に触れる。帰国後、東京帝国大で生物学を学び、同志社大学などで講師を務めた。産児制限運動（多産を避け、貧困を防ぐという主張）に関わり、労働者教育や農民運動にも携わる。労働農民党に所属していた1928年、

第1回普通選挙で京都第2区から立候補して当選。国民の思想や言論の自由を弾圧する治安維持法に反対姿勢を貫く。多くの政治家が圧力に屈する中、孤軍奮闘したが、29年、暗殺された。39歳だった。

### なぜ命を奪われた？

戦前、共産主義の浸透・拡大を防ぐため、政府が1925(大正14)年に制定したのが治安維持法。国家体制や私有財産制度を否定する結社を禁じ、やがて拡大解釈され、軍や政府に批判的な多くの国民が検挙され、弾圧された。28(昭和3)年には最高刑が懲役10年から死刑に改められた。その改定に断固反対したのが衆院議員、山本宣治だった。

29年3月5日の夜、山本は定宿にしていた東京・神田の旅館「光栄館」で遅い夕食をとっていた。その日、治安維持法を改定する緊急

勅令の事後承諾案が帝国議会で成立した。山本は反対演説を阻まれ、無念の思いだったに違いない。

そこへ一人の男が面会を求めて訪れた。山本が断っても男は食い下がる。やむなく山本が部屋に入ると、男は突然、山本に議員辞職を勧告。山本が拒むと、男は短刀を取り出し、もみ合いの末、山本の首と胸を切りつけた。山本は階段から転げ落ち、息絶えた。男は37歳の右翼団体員だった。

### なぜ別所温泉に山宣碑？

山本は暗殺の4日前、農民運動を展開していた上小(じょうしょう)農民組合連合会(上小農連)の招きで、上田で約1000人を前に講演をしていた。山本と親戚関係にあり、のちに衆院議員になるタクラ・テル(1891-1986年、本名・高倉輝)が上田の別所温泉で暮らし、農民運動を指導していたのが縁だった。演説は聴衆に感銘を与えた。

暗殺を受け、上小農連は3月15日、山本を追悼する大会を開き、抗議の思いを込め、山本の記念碑建立を決めた。農民から資金を募り、翌年5月、別所温泉の一角、タクラの借家の庭に記念碑が完成した。

その後も官憲から碑を破壊せよとの攻撃を受けながら、斉藤房雄さん（旅館主人）らの手によって地中に隠されて守られた。71年10月に掘り起こされ再建された。この翌年に「長野山宣会」が発足している。碑には「生命は短し科学は長し」と山本の座右の銘がラテ

ン語で刻まれている。



## 赤紙配りと3000万署名

土浦母親連絡会と土浦憲法共同センターに結集する各団体は12月8日、恒例の赤紙配りと3000万署名を駅頭で行いました。24名の参加で署名は64筆を集約しました。

「2017平和の旅」にご一緒させて頂いて秋の信濃路を満喫した。20年以上も前の「平和の旅」で長野を訪れて以来で、当時はまだ無かった「ちひろ美術館」と「無言館」も楽しみだった。結果は、期待以上の感激の連続。この旅の最後、山本宣治記念碑の訪問と現地ガイド藤原氏（長野山宣会）の案内と説明には心を揺さぶられた。

旅を終え日常に戻り、相変わらずの国会騒動を目の当たりにして、ふと故郷小樽の思い出と「啄木・多喜二・宣治」の3人が脳裏を駆けめぐった。これまでの67年間を振り返れば、北海道札幌・小樽・北見での23年間、土浦に移り住んでからの44年間、茨城の良さはわかってきたが、故郷北海道とりわけ小樽への郷愁は深いものがある。

高校時代は多喜二の住居跡脇を通り、多喜二が毎朝駆け込んで勤め先（拓殖銀行小樽支店）に通った小樽築港駅から札幌へ通学。そして、今も小樽への帰省の度に使う小樽駅には啄木が詠んだ「子を負いて雪の吹き入る停車場に われ見送りし妻の眉かな」の歌碑がひっそりと佇んでいる。多喜二と啄木が小樽に居合わせたのは1ヶ月くらいの間である。

以上の二人に加えて、宣治に思いが及んだ理由は、時代背景の共通性である。3人を生年順に並べれば、啄木（1886年）、宣治（1889年）、多喜二（1903年）の順になる。3人に直接の接点は無さそうだが、

生存中の9年間（1903～1912）が重なり、同時代の空気を吸っていた事になる。その時代たるや惨憺たる暗黒時代で、順に列記するだけで想像に難くない。日清戦争（1894）、日露戦争（1904）、大逆事件・日韓併合（1910）、第一次大戦（1914）、治安維持法（1925）、そして15年戦争（1931～1945）。背筋も凍る時代を生きた3人である。

先の山宣会藤原氏から、帝国議会予算委員会について学んだ。宣治が時の警察が共産党員など治安維持法で拘禁している者に対して筆舌に尽くしがたい激烈・非道な拷問を加えていることを生々しく告発したのに対して、政府委員は「山本（宣治）代議士が御指摘になりましたような事柄、あの

ような事実が我が日本の警察行政の範囲内に於いてあるかどうかと云うことに付いては断じて之れ無しと申し上げて宜しかろうと思つて居る……」。この少し後に宣治は右翼の凶刃に倒れる。

この、あけすけと事実を隠ぺいする帝国議会の国会答弁。はっと思いあたるのがまさに安倍首相と彼の提灯持ち閣僚・官僚の面々の国会答弁である。戦争体験を持つ諸先輩が「今の時代は戦前と似ている」としみじみ述懐されていることに、なる程の感を抱く。しばらくは平和の旅の余韻から逃れられそうにない。

（大滝 誠）

### リレー随想

## 啄木・多喜二 ・宣治の時代 と今